

タイトル「北の富士流」(全 237 ページ)

出版社：文春文庫（文藝春秋）

第一刷：2019 年 6 月 10 日



著者紹介： 村松友視 （むらまつともみ）1940 年、東京生まれ。慶應義塾大学文学部哲学科卒業。中央公論社の編集者を経て文筆活動に入る。デビュー作『私、プロレスの味方です』で、一躍脚光を浴び、1982 年、『時代屋の女房』で第 87 回直木賞を受賞。1995 年、ユーモアと哀感を行間のにじませた傑作『アブサン物語』は、多くの読者の心を捉えた。また 1997 年、祖父村松梢風の生涯を描いた百冊目の力作『鎌倉のおばさん』で、第 25 回泉鏡花賞を受賞。著書多数。

概要説明：いまや「日本一着物が似合う男」として NHK の大相撲解説で人気の北の富士勝昭。第 52 代横綱であり、親方として千代の富士、北勝海の二人の横綱を育て上げた名伯楽であります。そんな北の富士の男としての魅力を余すところなく綴ったのが本書であります。老若男女全ての大相撲ファン、いや全日本国民、必読の一冊！

<内容説明>

<前書きのようなもの>

力士時代、親方時代、解説者時代、イメージ先行によるスキャンダルも含め、常にどの時代も大相撲の魅力を醸し出しているのが「北の富士」です。

第1章 北の富士前夜、北海道のけしき

その1 戦争景気とその余波

○北の富士勝昭（本名・竹沢勝昭）は、1942年（昭和17）3月28日に7人兄弟の次男として、北海道東部の美幌町に生まれた。

○戦争末期の社会混乱に翻弄され、家族は美幌→留萌→旭川へ移り住んだ。

○日常生活の現実的寂しさを子供達に感じさせなかったのは、母の包容力に裏打ちされていたのでは。

その2 ふるさと留萌時代

○小学校から中学にかけては野球に夢中で、投手としてスピードボールを投げていたがコントロールが悪く、エースではなかった。脚も瞬発力だけはあったが、遅かった。

○同級生に障害を持った子がいたが、クラス皆でリヤカーに乗せて学校の送り迎えとかし、そういう事を積極的にやるタイプの少年で、友だちからの人気もあった。

その3 原石の輝き

○留萌時代の友人達からは、同級生の北の富士に対する親しみがある。留萌には、ちょくちょく訪れる。

○東京在住の中学時代の友人とは、序二段時代からの再会で、その後もその絆は続いている。

その4 横綱千代の山との出会いと入門

○勝昭少年が中三の時、夜逃げ同然に引っ越した旭川では、足の踏み場のないという状態の生活に一変した。横綱千代の山との縁から出羽海部屋に入門したが、最初から歓迎されての入門ではなかった。

○三段目までの出世のスピードは、遅々としたものだった。

その5 <かわいがり>から四股名「北の富士」の誕生へ

○三段目でもたついていた頃、兄弟子からの「いじめ」にあい、半殺しの目に遭った。その後遺症で、急性盲腸炎、腹膜炎を併発し、50日間入院。それを契機に四股名を「北の富士」に変えた。別人間に変貌し、その後の成績となってあらわれた。

○出羽海親方の急死により、新出羽海親方が誕生し、その独特の現代風育成方針により、北の富士は急速に力をつけ、新親方に親しみの情を持っていた。一方、千代の山への恩による筋道もあった。二人の親方に対する北の富士の微妙なバランスがあった。

第2章 私と相撲の遠距離交際

○著者は、自分は相撲通ではないと謙遜するが、力士、若い衆、呼び出し、行司、検査役の

親方などに対する「愛情に裏打ちされた見識」は並々ならぬものがある。

○一時、プロレスファンだった著者を、再び大相撲に戻したのは、新進気鋭の北の富士であった。

第3章 猛稽古と遊びの方程式

○新出羽海親方の教育方針は、部屋の力士にやる気を起こさせた一方、北の富士の生来の奔放な感覚に拍車をかける効果を与える事となった。親方は、北の富士をかわいがり、「あれは遊ばせて、稽古させよう」「遊ばせい、どんどん遊ばせて稽古させろ」と指導した。

○北の富士は身体が柔らかく、抜群のスピードの持ち主だったが、受け身になると慌てる、それで負けなくてもいい人に負けてボカが多かった。又、そのボカを火事場の馬鹿力で逆転もした。

第4章 出世みち三步進んで二歩下がる

○1963年（昭和38年）3月に十両昇進を果たし、同年11月場所で十両史上3人目の15戦全勝で優勝し、1月場所で新入幕を。時代は大鵬時代であった。大関取り、横綱取りレースは、玉乃島が格好のライバルであった。

○大関には、直前三場所の成績からまだ先であろうとされていて、準備も無い状態であたふたと協会からの使者を迎えた。大関昇進後の北の富士は、熾烈な大関獲りレースの後のエアポケットのような精神状態であった。

第5章 破門から初優勝への大逆転

○1967年（昭和42年）九重部屋は、出羽海部屋から破門される形で、独立が認められた。北の富士は、最悪の時は破門ゆえに廃業も覚悟しながら、恩義ゆえに九重親方と行動をとるにした、

○独立直後の大阪場所では、大関北の富士と十両の松前山が優勝し、九重部屋のダブルタイトルの獲得となった。

○直ぐに横綱と期待されたが、優勝が遊び心と呼び起こす。祝儀はたっぷりあり、手相撲（自前）で高級クラブにも行けるとあってご機嫌。カド番に立つが何とか給金を直してしまい、遊びと言う甘い世界から簡単には目が覚めなかった。

第6章 ライバル玉の海との出世競争と熱き友情

○九重部屋へ移籍直後の優勝と二度目の優勝のあいだの3年間は、夜の帝王に繋がる「軟派」

とライバル玉の海との熱い友情と熾烈な「横綱獲りの競りあい」であった。

○柏鵬時代の後を受けて、北玉時代が到来し、同時に横綱に昇進し、北の富士・雲龍型、玉の海・不知火型の土俵入りとなる。2歳年下の玉の海が急死し、代行して北の富士が不知火型の土俵入りを務めた美談は有名。

第7章 「夜の帝王」と「ネオン無情」の極彩色

○1967年（昭和42）11月、北の富士は「ネオン無情」という歌をレコーディングし、その年は他のヒット曲も多く、その中でのヒットであった。あの時代の「反秩序」の風への逆行と見なされるのはまずい、という相撲協会の空気もあったのだろう。さまざまな事情や思惑につつまれながら、当の北の富士は機嫌よく「ネオン無情」を歌っていた。

○遊びの場が、花柳界から次第にナイトクラブやキャバレーに移行し、北の富士のフランチイズもその辺りになり、「夜の帝王」の称号もダテではない。遊び仲間の筆頭は「龍虎」であり、共犯者としてお互いを利用していたようである。

○北の富士は、大袈裟でなく「気遣い」や「心配り」のできる人。遊びの場で出会う人々によって、更に肥やされ、洗練され、醸成されていった筋道に、大いなる興味を向ける。

第8章 横綱時代の万華鏡

○「香車」「プレイボーイ」「現代っ子横綱」「夜の帝王」とマスコミのネーミングは揶揄を含めた人気ともとれたが、1970年（昭和45）から4場所続きの11勝4敗により「イレブン横綱」は批判を込めたネーミングで、本人にも相当堪えたようだ。

○大横綱「大鵬」の引退が起爆剤となり、北の富士は1971年（昭和46）5月場所に6度目の優勝を。翌年1月場所の角界のプリンスとして注目を浴びた関脇貴乃花との勝負は、「かばい手」「つき手」の勝負判定で有名な一番である。

○その年の北の富士は不眠症による休場が続き、その中で治療の一環として訪れたハワイ訪問が、マスコミで糾弾され、協会からも厳重注意を受けた。

○不振を続けた北の富士であったが、1972年（昭和47）9月場所は、3度目の全勝優勝を果たした。1973年（昭和48）の3月場所は、前年に誕生した2歳年上の遅咲きの横綱 琴櫻に刺激され、栃若と同じ「10回目の優勝」を果たした。

○以後衰えを自覚するようになる。報道陣を前にして、師匠への相談もせずに、「格好よく引退したいがため」に、迷わず引退を表明してしまった。人間味満開の男道を生き抜く北の富士らしい引退であった。

第9章 二横綱を育てた名伯楽の奥行き

○1975 年（昭和 50）の引退相撲は、ファンを驚かす北の富士流で、断髪式が終わり北の富士は白のタキシード姿で土俵に再登場して、持ち歌である「ネオン無情」を歌ったのだった。それ以降の力士の断髪式後はタキシード姿に変わったが、当時の協会のお偉方は渋い顔だったという。

○引退後、最終的には 1977 年（昭和 52）九重部屋を継承し、36 人の大部屋になった。その中から、横綱千代の富士と横綱北勝海を誕生させた。北の富士は「伝説的な大横綱」のイメージではなかったが、2 人の横綱を育てた「名伯楽」であった。千代の富士に「前褌を取る相撲に徹しろ」との指導は功を奏し、北勝海は、北の富士の持つ「明」の部分に隠された「実」の部分の移し取ったと言えるのではないだろうか。

第 10 章 北の富士流の試練

○明快で奔放な 1 本の竹のように映る北の富士を顕微してみると、折々に刻まれた屈折の節が、度々の「四股名」及び「かつあきに当てる漢字」の変更から見えてくるようだ。

○相撲協会での役職を務める事になると、協会の世間的対面を慮らねばならず、社会的秩序からの批判の矢面に立たされる立場となる。特に北の富士の場合は、マスコミの攻勢に脅かされるケースが多く、天衣無縫の北の富士流にはそんな相手に対する備えはなかった。

○マスコミは、反社会的団体の者との交際を、一部は誤解によるものであったが、持ち出し、わきの甘い北の富士を攻め立て、相撲協会も厳しい処断を行った。これは、当時の「無気力相撲」「黒い交際」に対する世間の批判が高まる前に、北の富士をスケープゴートにして、先手を打った「茶番劇」とも捉えられた。

○北の富士は、不祥事のさい、一切言い訳めいた事を言わず、自分の「不徳」として心におさめている。今の「正義」は時や時代が変わると風化する、ことを認識していたのではないだろうか。マスコミの糾弾の基準となる「正義」もまた、時の経過によって、刻々と変化せざるを得ぬ一面をはらんでいる。

○先年、「八百長」「野球賭博」「いじめ」「薬物疑惑」などがいちどきにクローズアップされ、その浄化にいそしんだ相撲協会は、「立ち合いに両手につく」事を励行した。

○女性関係のスクandal、結婚にまつわるゴシップなども、北の富士の場合、ほとんどが愛嬌をとまなううっすらとした霧の気配を残すのみという趣に至っている。

○マスコミ、世間、協会などからの「試練」が、北の富士に「陰」の色を与えることも、「汚れ」を焼き付けた様子も見当たらない。その「試練」の痕跡は、時を経て「負」の札を「正」の札に裏返す、北の富士流の輝きの底に、さまざまな模様をなして沈んでいるのだろう。

第 11 章 テレビ解説席の粋、華、情

○1998 年（平成 10）に協会を退職した北の富士は、そこから NHK 専属の大相撲解説者と

いう貌を開花させた。その解説の醍醐味は、身銭を切ってこなしてきたこれまでの生き方全体から醸し出される、比類ない「味」の上に成り立っており、テレビ画面に映る解説席における大相撲の香りある贅沢なけしきを作っているところにある。

○相撲をはなれた時間では、好きなゴルフを、ふるさとの北海道を含め、欠かさない。千歳空港に降り立つと、北の富士は「道産子」に戻るようである。

○北の富士の実の妹の信子さんによると、「母ミヨシさんは北の富士の登場するテレビ中継をいっさい見なかった」「北の富士の入門から引退の18年間、茶断ちした」。燦々と輝く北の富士を、後方から母ミヨシさんは自らもひそかに光を放ちつつ瞬きつづける星でもあったのだ。

〈後書きのようなもの〉

著者は、直木賞受賞者同士の懇意から、銀座のクラブ「姫」のマダム山口洋子さんのお店の「姫の3階」と呼ばれるカウンター席に行き、そこで北の富士さんと顔見知りとなった。その後、そのカウンターでのコースターを介してのペンフレンドのような状態が暫く続いた。「姫の3階」での初対面から30年ばかりの時を経て、北の富士さんと著者のあいだに時おり食事をして歓談する時間がようやく訪れた。その久方ぶりの再会の時、北の富士さんは67歳、著者は69歳だった。そして更に6年ほどの歳月が経った。人間味満開の男道たる「北の富士流」の追跡など不可能にもかかわらず、作成してしまった。北の富士親方の寛大なお心で、お許しのほどを。

「文庫化へのあとがき」

単行本の上梓は2016年7月だったが、それ以降「稀勢の里の横綱昇進」「暴力沙汰のニュース」「元貴乃花親方の奇妙の色さえ帯びた言動や表情」「貴乃花離れを感じさせる『貴景勝』の救世主ぶり」など、そんな混乱の季節にも北の富士さんは、男の粹、華、色気、渋みそして矜持を伝え続けている。この文庫化が、あらゆる老若男女すべての皆様に、この機会に北の富士と言う類稀なる生命体の内側や奥底を広く知って頂きたい。//